

エコノミーのなかの母子

——谷崎潤一郎『母を恋ふる記』論——

Child and Mother in the Economy: On Tanizaki Junichiro's *Haha wo kouruki*

井上 優

INOUE Masaru

要旨

谷崎潤一郎『母を恋ふる記』(大阪毎日新聞)夕刊 一九一九(大正八)・一八〇二・二九、「東京日日新聞」同年・一十九〇二・二二二)は、大正六年に死去した母、関への〈母性思慕〉を描き、谷崎文学の中でいわゆる〈母恋いもの〉の系列に連なるものとされてきた。谷崎の本格的な〈母恋いもの〉小説のはじめりに位置づけられるものとして重要視されてきており、作中には以降の谷崎の〈母恋いもの〉と共有する要素も散見される。また主人公Ⅱ語り手が見た「夢」を語ったものとして幻想文学としての側面もある。しかし本論考では、「潤一」と呼ば

れる語り手「私」の「夢」の中で彼が「お母さん」と呼びかける二人の女と彼の関係には、〈母性思慕〉や〈女性性〉といった観点からの解釈に覆い隠されてしまっているものがないかを考察する。物語の結末において母子の間で流される涙には、母子の一体化ということが実現されているのかどうかについて、「期待」と「贈与」の観点から捉え直しを行う。

作中の語り手「私」は、初めに訪れた家の「媪」に「無条件な期待」を求めつつ得られなかった。にもかかわらず、その後に出会った母に対しては、交換条件を介在させた、「円環の経済Ⅱ配分法則」に基づく「涙」しか「贈与」しなかった。「私」は他者として「無条件な期待」を受けられなかった子供であるとともに、母

を「無条件な歓待」で迎えない子供となっており、そして母もまた子に対し交換条件を示すことで「無条件」に「歓待」をなし得ていない。母子の間においてさえも、いや、誰でもないこの母でなければならず、また他の子ではないこの子でなければならぬという、相互の同定と承認が強く求められる関係性であるがゆえにこそ、そこは「無条件な歓待」の成立がかえって最も難しい場であるのかもしれない。一見、母子の喜びに溢れた、母子の融合が出来た、〈母性思慕〉の成就であるかのような瞬間には、そうしたアイロニーが潜んでいる。

一 はじめに

谷崎潤一郎『母を恋ふる記』（大阪毎日新聞）夕刊 一九一九（大正八）・一十八～一十九、「東京日日新聞」同年・一十九～二・二十二）は、大正六年五月に五十二歳で死去した、美しかったとされる母、関への〈母性思慕〉を描き、後の『吉野葛』（中央公論）一九三二（昭和六）・一～二）、『蘆刈』（改造）一九三二（昭和七）・十一～十二）、『少将滋幹の母』（毎日新聞）一九四九（昭和二十四）・十一・十六～一九五〇・二・九）、『夢の浮橋』（中央公論）一九五九（昭和三十四）・一〇）などと共に、谷崎文学の中でいわゆる〈母恋いもの〉の系列に連なるものとされてきた。千葉俊二が「母性思慕の主題がはじめて渾然たる芸術作品として谷崎文学のうえに結晶」した小説と指摘しているように、谷崎の本格的な〈母恋いもの〉小説のはじまりに位置づけられるものとして重視されてきた。作中には以降の谷崎の〈母恋いもの〉と共有する要素

も散見される。また主人公「語り手が見た「夢」を語ったものとして、幻想文学としての側面もある。谷崎文学を読み解く上でも、重要で多様な論点に開かれていた小説であるが、本論考では、「潤一」と呼ばれる語り手「私」の「夢」の中で、彼が「お母さん」と呼びかける二人の女と彼との関係には、先行研究で指摘されてきた〈母性思慕〉や〈女性性〉といった観点からの解釈に行き着くだけでは覆い隠されてしまうものがないかを考察していきたい。物語の結末において母子の間で流される涙をめぐって、たとえば秋山公男が「二人の『涙』はその魂の合一の徴証ともみなしうる」というような、母子の融合や一体化が実現されているのかどうかについて、「歓待」と「贈与」の観点から捉え直しを試みたい。

二 「遣るせない悲しみ」と疎外について

この小説は、三十四歳の語り手「私」が見た「夢」の内容が語られていく。「夢」の中で七、八歳の子供になっている「私」は、「人間の世を離れた、遙かなく無窮の国を想はせるやうな明るさ」のもと、「気持次第で、闇夜とも月夜とも」感じられる晩に、両側が松並木になっている街道を歩いている。

夜更けの「淋しい田舎路」を一人で歩く「私の小さな胸の中は、夜路の恐ろしさよりもつと辛い遣るせない悲しみのために一杯になつて居た」が、それは「あの賑かな日本橋の真中にあつた私の家が、斯う云ふ

辺僻な片田舎へ引つ越さなければならなくなつてしまつたこと、昨日に
 変る急激な我が家の悲運」によるものであり、それが「子供心にも私の
 胸に云ひやうのない悲しみをもたらして居た」という。「黄八丈の綿入
 れに艶々とした糸織の羽織」や「キヤラコの足袋に表附きの駒下駄」の
 装いをしていたものが、「まるで寺子屋の芝居に出て来る漣くりのやう
 な、うすぎたない、見すばらしい、人前に出るさへ耻かしい姿になつて
 しまつて」いる。加えて「毎日お父さんやお母さんを助けて、一緒に働
 かなければなら」ず、「水を汲んだり、火を起したり、雑巾がけをしたり、
 遠い所へお使ひに行つたり、いろ／＼の事をしなければならな」くなつ
 ている。

「私」は貧困な者として「白い一とすぢの街道」が続く世界に突如置
 かれていた。こうした境遇に「私」があることは、谷崎が子供時代に経
 験した自家の経済的困窮の体験が投影されているであらうことは考えや
 すいところである。谷崎は『幼少時代』(『文藝春秋』一九五五・四)
 五六・三二)の中で次のように書いている。

父は母に昔のやうな栄耀は兎も角も、水仕事や御飯炊きまでさせる
 には忍びないと云ふ気持があり、母もさう云ふ仕事には馴れず、未
 だに飯の炊き方も知らないお嬢さん育ちのところがあつたので、暮
 らしが困難になつて来ても、やはり女中を一人だけは置く必要があ
 つた。で、女中のゐない日は、父が母より先に起きて、火をおこし
 たり、竈を焚きつけたりしたが、私もとき／＼父の代りを仰せつけ

られた。冬の朝など、まだ蔵座敷に行燈がともつてゐて、両親が寝
 床にゐる時分に、私一人だけ早起きをして、台所の用をするのであ
 つたが、夕方のランプ掃除や折々の使ひ走りにも増して、此のこ
 が何よりも味気なかつた。

しかし、この貧窮者としての「私」の悲しみは、そうした谷崎自身の
 子供時代の回顧的な記録のような設定になつていふことだけで読み
 過ごすわけにはいかないだろう。

もう、あの美しい錦絵のやうな人形町の夜の巷をうろつく事は出来
 ないのか。水天宮の縁日にも、茅場町の薬師様にも、もう遊びに行
 く事は出来ないのか。それにしても米屋町の美代ちゃんは今頃どう
 して居るだらう。鎧橋の船頭の悴の鉄公はどうしたらう。蒲鉾屋
 の新公や、下駄屋の幸次郎や、あの連中は今でも仲よく連れだつて、
 煙草屋の柿内の二階で毎日々々芝居ごっこをして居るだらうか。も
 うあの連中とは、大人になるまで恐らくは再び廻り遇ふ時はない。
 それを考へると恨めしくもあり情なくもある。

なじみの土地を離れてしまつたことの寂しさのみならず、その界隈の
 幼なじみとの断絶が、「私」一人の除け者意識として感じられている。
 自分の家の経済的没落が友情関係からの脱落を招いているが、その脱落
 は居住地が遠ざかつたことのみが原因ではない。そのことが「恨めしく」

という悔恨だけでなく、「情けなく」というように自尊心の損傷として受けとめられていることに注意したい。それはかつて「黄八丈の綿入れに艶々とした糸織の羽織」や「キヤラコの足袋に表附きの駒下駄」で仲間との遊びに加わっていたような自分が、最早朋輩との間でそうした体面を保った形での関係性を継続できないことによる恥辱意識である。

幼い子供たちにとって友達関係はほぼそのまま社会的関係に相当するが、その関係に家庭の経済的要因によって参入することが困難となるということは、子供たちにとって社会的な疎外となる。ここで「私」が感じている「悲しみ」には、子供たちの友情関係にも疎外をめぐる経済と社会との強い関係性が存在することが、とらえられているのではないだろうか。「現代社会の構造的矛盾」は「友情の条件」を考えてみると明瞭に現れるとする金賢京は、「友情」が「選択的關係」であることにについて論じ、それは「相手側の固有な特徴を認識して評価するところから始められる」ものであり、「靈魂と靈魂の出会いであるがゆえに外的要素、つまり肉体や環境に属する諸特徴は重要」ではなく、「友情の観念はある種の貴族主義と結合されるが、その貴族主義は純粋に精神的なものに基づかねばならない」ものとされるにもかかわらず、問題は「精神的な諸特徴もまた検討してみれば環境の産物」であることを指摘している。³その例として金は「靈魂の深さを測定する手段として使われる音楽に対する嗜好は、青少年期にいかなる音楽に主にさらされていたかによって変化し、これは再び階級的で世代的な諸変数に還元される」ことを挙げている。⁴また「純粋な友情の観念は純粋な贈り物の観念と連結」

しており、「友情は同等性を前提にするがゆえに、友情をとりもつあらゆる交換は二人の間の均衡を崩さない線においてなされねばならず」、贈り物は「経済的計算によって与えられてはならず、相手側に屈辱や負債意識を抱かせようとする意図で与えてもならない」ものであることに言及する。⁵しかし解雇されて経済的な自由度を失いつつある場合、友人との食事の席でかつてのように友人たちに食事を奢れなくなるだけでなく、自分が自らの食事の代金を払おうとすれば友人たちが思いやりでそうさせないようにすることがかえって本人の自尊心を傷つけ、そうしたことによって友情が次第に失われていくといういきさつを、金は示す。

「自らが「贈与者」となれないこと、あるいは相手からの「贈与」に過大さを感じることはやましさを生み出す。「友情を分かち合おうとすればまず贈与者にならねばならない」⁶が、「経済的自律性に基づく自由な関係」という「友情の理想」は、「経済的な疎外」が「社会的疎外」につながる事態を見えづらくしていることを金は明らかにしている。⁸

「文化資本」⁹を同等に持ち合わせている存在であるかどうか、同程度の「贈り物」をなし得るかどうかが友情を取り結ぶ際に実際には関与してくることがあるとすれば、「私」たちによって毎日繰り広げられているたごっこ遊びとしての「芝居」は、彼らにとつての「文化資本」の一つの共有である。その「芝居」をもとにごっこ遊びができることは友人仲間への参入の条件としての互いの同質性を確認できることであつたが、それからのみならず、「人形町の夜の巷」の「美しい錦絵のやうな」光景や、「水天宮の縁日」や「茅場町の薬師様」のような信仰と祝祭といっ

たその土地に根ざした遊びや文化の共有からも脱落し、朋輩との友情関係の維持が困難となった「私」は、「経済的疎外」が「社会的疎外」につながっていることを認識している。芝居を見ることも縁日で遊ぶこともそのために使える金銭の自由が求められるが、共にそうした遊びにながりに得るには、お互いがそうした経済的な基準を満たしている者である必要がある。

「もうあの連中とは、大人になるまで恐らくは再び廻り遭ふ時はない」と「私」は思っているが、それは大人になることで空間的な距離を自由に大きく移動できるようになって再会できるまでということだけではない。自分が扶養される者でなく、自律して経済活動を行ってその経済的地位を回復し、彼らに「贈与」ができるようになるまでという意味が込められているだろう。貧困な子供としての「私」は、友人たちに最早「贈与」を行うことができる存在ではなく、均衡ある分かち合い、交換をなし得ないことによる友情からの脱落の屈辱を痛感している。友人仲間としてその共同体の構成員として認証されるにふさわしくない存在になっているという疎外感に襲われている「私」から見えてくるのは、「贈与者」たり得るかどうかということと、それに伴う自他の承認との関係性である。

三 「歓待」されない「私」

この物語で「私」は二人の母なる人物に遭遇する。まず最初に出会う

のは年老いた見知らぬ母である。街道を歩き続ける「私」は一軒の「茅葺きの百姓家」を見出す。その家を自分の家ではないかと思ひ、そこでは父母が待っていて帰宅した自分をいたわってくれるのではないかと想像する。その家では夕餉の支度がされており、「嗅ぎ馴れた味噌汁の匂」や秋刀魚を焼いている「脂の焦げる旨そうな匂」がしており、外から家の中を見ると火吹竹を持って竈を吹いている母らしき後ろ姿が見える。

しかしその姿は「田舎のお媼さん」のようであり、声は街道の「古沼の蓮の音よりももつと皺喰れて微か」で、「白髪交りの髪の毛には竈の灰が積つてゐる」て、「頬にも額にも深い皺が寄つて、もうすつかり老碌してしまつた」ようである。その「媼」に「私はもう長い間、十年も二十年もかうして悴の帰のを待つてゐるんだが、しかしお前さんは私の悴ではないらしい。私の悴はもつと大きくなつてゐる筈だ。さうして今にこの街道のこの家の前を通る筈だ。私は潤一などと云ふ子は持たない」と否認され、「さう云はれて見れば成程そのお媼さんは確に私の母ではない。たとひどんなに落ちぶれたにしても、私のお母様はまだこんな年を取つては居ない筈である」と、「私」は人違いであつたことを理解する。

「古沼」の枯れかかった「蓮」の「カサカサと鳴る」音は「皺がれた、老人の力のない咳を想はせるやうな、かすれた音」として「私」の耳に聞こえていたが、一方で「お前は誰だつたかね。お前は私の悴だつたかね」とたずねる「媼」の声は「あの古沼の蓮の音よりももつと皺喰れて微か」であり、「私」には「媼」が「古沼」の停滞した水や枯れかけた「蓮」

と類似したものとして捉えられ、後に水面が動き輝く「海」、そこで出会う若く美しい「新内の流し」の女とは対比的に描かれている。

この「媼」については、若く美しかった過去の理想的な母と、老いを重ねた現実の母との間での、母像の認否をめぐる「私」の願望の発露という観点から、研究上既に論議の対象とされてきた。千葉は「その老婆はやはり『私』の母であったと考えられないだろうか」と提起し、彼女が十年二十年帰りを待っている大きくなっているはずの悴とは「夢を見ている現在三十四歳の『私』自身である」と見做すことが出来るだろう」とする。「私」の意識（または無意識）では、老婆⇨実母はあの澱んだ古沼に、無気味で恐ろしい、死んだ存在として象徴されており、彼女が「『私』のアイデンティティーを認めてくれない」のは「『私』の無意識的な願望」であって、「むしろ『私』が老婆を拒絶したのであり、『私』は無意識のうちに老婆である実母を抹殺した」ことになると言う。「青春期においては、年老いた母を眼前にしていたため、老婆⇨実母を抹殺することは出来ず、白昼の意識では承認し得ても、無意識界ではその老婆である母が『私』の『母』であることを認めることを恐れて、それから限りなく逃走をつづけていた」が、「現実の母の死に出会った彼は、いったん抑圧したそのような母のイメージを再び夢の中に浮かび上がらせ、それを拒絶すること」によって、「甞れ、年老いた母親のイメージを完全に抹消した」と論じている。¹⁰

永栄啓伸は、実母関と谷崎の小説に描かれる母像との関連性の観点から、「母恋い」の主題を「醜い母からの逃走であり、やさしい母性への

旅立ち」とするが、『異端者の悲しみ』（中央公論）一九一七年七月）に描かれる母の像が「美とは無縁の現実的な描写、これが母の死以前の〈母〉の姿なのである。そしてこの延長線上にまぎれもなく老婆を置くことができる」とし、「媼」も後に二人目の母として登場する「新内の流し」の女も「最初は後姿としてしか登場しない」ことに着目して、関が丹毒に顔を冒されたことにより「母の醜い顔に対する無意識的な恐怖を物語るのであろうか」と推察している。¹¹秋山は「一軒家と老婆とは、冷酷な現実に触れてそれを否認し、次いで夢想の世界に参入する契機・転換点として設定されている」と見る。¹²

また仁瓶浩明は「醜怪な老女・第一の〈母〉が、〈沼〉（↓死）によって隠喩化されている」とすれば、「〈沼〉は確かに死んだ記憶、動かぬ固着したものとして老婆のなかに封印されていたと言え」とし、「〈母〉はすでに七、八歳のときに若く美しいままに（↓第二の〈母〉）死んでいたのであり、現実の母（↓第一の〈母〉）は、それ以来その実際的な死の時期（一昨年）まで、老残を晒すものとしてしか『私』には映じていなかったのだ」と理解すべきであり、「記憶の古沼に沈めたものは、この間のすべての母なる人の醜悪な姿だったのであり、彼女と関わった歴史・時間なのであった。第一の〈母〉に拒否されたとは、彼女を、現実の母を拒否した謂に外ならない」と述べている。¹³

これらの指摘にあるとおり、作者谷崎にとって、父倉五郎の商売の不振から借家に転居し、以前の裕福な暮らしから母も含め家族が脱落するようになっていったのが、彼が「七つか八つの子供」である「私」と同

じ年齢のすぐ後のことであり、そうした過去や、若かった頃は「美人絵双紙の大関」（前掲『幼少時代』）にもされていたという母が、貧窮生活の中で年老いねばならなかったことへのネガティブな感情が、「古沼」と「媼」を結び付けて、美しい女と対照的に表現されるところに反映していると考えられる。

しかしこれらの先行研究では「媼」が「私」を否認しているようでいて、その実はこの「夢」を見ている「私」が「媼」を拒絶しているとの逆転が起こっていることが明らかにされている一方で、「媼」による「私」の拒絶が含んでいる重要な問題についての考察が手薄であるのではないだろうか。この点について考えてみたい。

「そんならお媼さん、私は夜路を歩いて来て大変お腹が減つてゐるんですが、何か喰べさしてくれませんか」

するとお媼さんはむつつりとした顔つきで、私の姿を足の先から頭の上までずつと見上げた。

「まあお前さんは、年も行かない癖に、何と云ふづう／＼しい子供だらう。お前はおふくろがあるなんて、大方謙を云ふのだらう。そんな穢いなりをして、お前は乞食ぢやないのかい？」

（中略）

「だつてお媼さん、其処にそんなに喰べるものがあるぢやありませんか。お媼さんは今御飯を炊いてゐたんでせう。そのお鍋の中にはおみおつけも煮えてゐるし、その網の上にはお魚も焼けてゐるぢや

ありませんか」

「まあお前は厭な兒だ。家の台所のお鍋の中にまで眼を付けるなんて、ほんたうに厭な兒だ。このおまんまやお魚やおみおつけはね、お気の毒だがお前さんにはやれないのだよ。今に悴が帰つて来たならば、きつとおまんまを喰べるだらうと思つて、それで拵へてゐるのだよ。可愛い／＼悴のために拵へたものを、どうしてお前なんかにやれるもんか。さあ／＼、こんなところにゐないで早く表へ出て行つておくれ。私は用があるんだよ。お釜の御飯が噴いてゐるのに、お前のお蔭で焦げ臭くなつたぢやないか」

「十年も二十年も」帰るのを待つている、「私」よりも「もつと大きくなつてゐる筈」の悴のために用意した食事だとして、「私」を蔑視しつつ断固拒絶する「媼」の言動には、親の子への愛情の代償に、他者に対する閉鎖性が伴うことが露わにされている。困窮した「私」が求める無償での救いの「贈与」を「媼」は拒否する。「媼」からすれば「私」は突然到来した他者であるが、その他者に無償の「贈与」をすることで彼を「歓待」へと導き入れることはなされない。「歓待」は他者の迎え入れであるが、それは政治、倫理、法の条件が問われることにもなるものだ。わたくしたちが生存する現代の移民や難民をめぐる政治状況にも、それは密接に関わるものであるが、「歓待」について考察した哲学者に、その「二律背反」を指摘したジャック・デリダがいる。デリダの言説を導きの糸として、この場面における問題を明らかにしておきたい。デリ

ダは「歓待」について次のように語っている。

絶対的な歓待のためには、私は私の我が家 (mon chez-moi) を開き、(ファミリー・ネームや異邦人としての社会的地位を持った) 異邦人にたいしてだけでなく、絶対的な他者、知られざる匿名の他者にたいしても贈与しなくてはなりません。そして、場(「機縁」)を与え (donner lieu)、来させ、到来させ、私が提供する場において場を持つがままにしてやらなければならないのです。彼にたいして相互性(盟約への参加)などを要求してはならず、名前さえ尋ねてもいけません。¹⁴

一方には、歓待の唯一無二の〈掟〉(La loi)があります。すなわち、限らない歓待の無条件な掟(到来者に我が家のすべてやおのれの自己を与えること、名前も代償も求めることなく、どんなわずかな条件でもみたくすことを求めることもなく、彼におのれの固有なもの、わたしたちの固有なものを与えること)があります。他方には、歓待のもろもろの掟、つねに条件づけられ、条件に依存する権利や義務があります。¹⁵

「絶対的」で「無条件」の「歓待」とは、異邦人にその名を問うたり、アイデンティティを把握したり、あるいはどのような些細な代償も要求することなく、相手を迎え入れ、自ら持つすべてのものをも与えることを惜しまないことである。一方で「条件」的な「歓待」とは、名を問い、

アイデンティティを確認し、権利や義務を定める、交換を介したそれである。「条件」的な「歓待」は他者の他者性を全きままに受け入れず、それを剥奪する。

「媼」と「私」とのやり取りにおいて、「媼」は突如到来した他者としての「私」に対し、「お前は誰だつたかね」とまずその名を問う。しかしその身なりから「乞食」とのレッテルを貼ってその他者性を安易に毀損したあげく、わずかの迎え入れも行わず、そこには「条件」的な「歓待」すら生じない。「媼」に対して全くの他者である「私」が一飯を求めることは、無償の「贈与」によって「無条件」の「歓待」を求める行為であるが、「条件」的な「歓待」すら実現しない以上、「絶対的な歓待」はなおのこと可能ではない。このように、このテクストにおいては〈母恋い〉／〈子恋い〉の陰に、到来する他者の受け入れやその排除をめぐる倫理的な問題が仕掛けられているのではないだろうか。若く美しくかつ母と年老いた母とをめぐる母像の認否の願望といった〈母恋い〉のモチーフから考察されてきたこの場面には、前章で指摘した友情関係に内包される経済的要因による「社会的疎外」や、自他の承認の問題とともに、わたしたちが存在する広く様々な場で生ずる他者の迎え入れという根源的な問いが潜在しているのではないだろうか。

四 「理由の知れない無限の悲しみ」について

街道をたどりながら「私」が感じている「遣るせない悲しみ」には、

先述したとおり家の没落によって貧しい生活に陥ったことで余儀なくされたことから来るもののみならず、それとは異質な「悲しみ」も同時に存在している。

だが、私の胸を貫いて居る悲しみは単に其のためばかりではないらしい。ちやうど此の松並木の月の色が訳もなく悲しいやうに、私の胸には理由の知れない無限の悲しみが、ひし／＼と迫つて居るのである。なぜ此のやうに悲しいのだらう。さうして又、それ程悲しく思ひながらなぜ私は泣かないのだらう。私は不断の泣虫にも似合はず、涙一滴こぼしては居ないのである。たとへば哀音に充ちた三味線を聞く時のやうな、冴え／＼とした、透き徹つた清水のやうに澄み渡つた悲しみが、何処からともなく心の奥に吹き込まれて来るのである。

「私」が感じているもう一つの「悲しみ」は、このように「月の色が訳もなく悲しいやう」な「理由の知れない無限の悲しみ」として「私」には容易に把握しきれないものであり、「哀音に充ちた三味線を聞く時のやうな、冴え／＼とし」た「清水のやう」な「悲しみ」であつて、その感情の質感が「月」や「三味線」や透明な「清水」に関連付けられてゐるが、それは後に、「新内の流し」姿の女（母）を白く照らし出す「月の光」、彼女の奏でる「新内の三味線」を「悲しい音色を響かせ」、冴えた撥のさばきが泉の涓滴のやうに「胸に沁み入る」ものと「私」が

感じることに関連性が見出せるように語られている。道中「私」が感じ続けてきた「胸を貫いて居る」理由の知れない無限の悲しみは、もともと「月」、出会う女（母）と通ずるはずのものとしてあつた。

しかしそれに加えて、「何処からともなく心の奥に吹き込まれて来る」というように、それが発生してくる場所が「私」の外部であり、またその原因も分からないものとして説明されていることに留意したい。「私」は「媪」の家を立ち去つた後、それまで歩いてきた道を再び進んでいくが、「殆ど不意に林の中から渺茫たる海の前景のほとりに立たされ」ることになる。「銀が光つてゐるやうな鋭い冷たい明るさ」の「月」に皎々と照らされた海岸の風景に、「私」は「あ、何と云ふ絶景だらう」と「恍惚」とし、次のように考える。

誰でもこんな月を見れば、永遠と云ふことを考へない者はない。私は子供であつたから、永遠と云ふはつきりした観念はなかつたけれども、しかし何か知ら、それに近い感情が胸に充ち満ちて来るのを覚えた。——私は前にもこんな景色を何処かで見た記憶がある。而も其れは一度ではなく、何度も／＼見たのである。或は、自分が此の世に生まれる以前の事だつたかも知れない。前世の記憶が、今の私に蘇生つて来るのかも知れない。其れとも亦、実際の世界ではなく、夢の中で見たのだらうか。夢の中で、此れとそつくりの景色を、私は再三見たやうな心地がする。さうだ、確かに夢に見た事があるのだ。二三年前にも、つい此の間も見つた事があつた。さうし

て実際の世界にも、其の夢と同じ景色が、何処かに存在してゐるに違ひないと思つてゐた。此の世の中で、いつか一度は其の景色に出遇ふことがある。夢は私に其れを暗示してゐたのだ。其の暗示が今や事実となつて私の眼の前に現れて来たのだ。――

この絶景に「永遠」を感じ、それを「前世」でかあるいは「夢」で繰り返し見たという。その「夢」はこの物語を語っている「私」が普段の生活において睡眠時に見たものということか、それともこの物語として語られている「夢」の中で七、八歳の子供になつて自分が見たことのある夢中夢であつたということなのか明確でないところはあがあるが、いずれにせよどこかはつきりしない遠い世界とつながつていて、そこから「私」の記憶に到来していた景色とそっくりであるということだ。さらに「実際今夜のやうな景色に遇ふと、誰でもちよいと死んで見なくなる」とも言う。だとすると、今「私」を内包している眼前の景色がつながつていとされる「私」の過去にあるこの「前世」や「夢」や「死」の世界と、「理由の知れない無限の悲しみ」が「心の奥」に「吹き込まれて来る」出所としての「何処からともなく」という場所とは、通ずるところがないだろうか。

「私」は自分も含んで「総ての物」が「縹渺たる月の光に蕩け込んで」いるこの景色を「絶景」と感嘆しているが、それは松の並木に遮られて暗い道を恐ろしさを抱きながら歩き続けてきたことから一転して、この景色をなつかしく好ましいものとして享受し出しているといえよう。

「壚」に「歓待」を拒絶され、「淋しい田舎路」を孤独に歩き続けてきた「私」にとつて、それまで彼を取り巻く世界は疎遠なものとしてあつたが、ここに到つて世界に「私」は開かれ出している。「私」はその「絶景」の前で「暫く恍惚として其処にゐる」が、それはその間、世界と「私」との境界が曖昧化していったということだ。享受とは、自らに開かれるものと自己との輪郭の曖昧化をもたすものだが、その享受ということをめぐる思索を行っているエマニュエル・レヴィナスの指摘を参照しつつ、この場面を考察したい。レヴィナスは「私たちが享受するものたちが私たちに到来するしかたをよりくわしく分析しておく必要がある」¹⁶として次のように書いている。

享受にあつても私たちは、それらを体系へと組織化する、技術的な目的の連関のうちに沈みこむことがない。ものは、それが手にされる環境のなかでえがきとられる。ものはたとえまず空間のうちに、大気のなかで、あるいは大地のうえに、通りに、道路にある。ものが所有に関係づけられる場合であつても、環境はものにとつて本質的なものでありつづける。(中略) ものたちがそこから私に到来する環境は、相続人が欠如した状態で横たわつている。環境とは、共通の、所有されえない基底あるいは領域なのであつて、本質的にいつ「だれにも」ぞくしてはいない。つまりは大地であり海であり、光であり、あるいは都市である。いつさいの関係と所有は所有不可能なものただなかに位置している。所有不可能なものが、内

含まれ包括されることなく、包括し内含するのである。この所有不可能なものを、始原的なものと呼ぶことにしよう。¹⁷

「私」が「享受」し出している風景は、レヴィナスが例に挙げている「大地」（砂浜）、「海」、「光」（月）といった「所有不可能なもの」で構成されておき、その点で「始原的なもの」によっている。しかもその風景が「前世」や「夢」、「死」の世界において「私」に経験されるものであるとすれば、そうした「私」の過去に属するものと、レヴィナスがいうような、さまざまなものが「到来」する「環境」とは、双方「始原的」であることを性質として共有している。そしてレヴィナスの指摘するような「始原的なもの」によって構成されている「絶景」が、「前世」や「夢」、「死」の世界という「私」にとつての「始原的なもの」とつながっているということであれば、「理由の知れない無限の悲しみ」の出所としての「何処からともなく」という場所は、そうした「始原的なもの」に存在するということになるのではないだろうか。

「私」が歩いてきた海岸沿いの街道のある「大地」、「月」が照らし「冴え返つた銀光がピカピカと、練絹のやうに輝いてる」「海の面」、「月」とその「光」といったものを含む「環境」において、「私」と「新内の流し」の女の姿になっている母とは邂逅することになるが、それは二人を「包括し内含」する「領域」であり「基底」的なものである。それらは誰もが「包括し内含」されていて、なおかつ「所有す」ることが本来不可能なものであり、このレヴィナスのいいかたによれば、二人の存在

を今「共通」して支えている「始原的なもの」である。

どうしたのか、女はふと立ち止まって、俯向いてゐた顔を擡げて、大空の月を仰いだ。（中略）すると、その皎々たる頬の上からきらり／＼と閃きながら、蓮の葉をこぼれる露の玉のやうに転がり落ちるものがあつた。きらりと輝いて何処かへ消えてしまったかと思ふと、又きらりと輝いては消える。

「小母さん、小母さん、小母さんは泣いてゐるんですね。小母さんの頬べたに光つてゐるのは涙ではありませんか」

私が斯う云ふと、女は猶も大空を見上げながら答へた。

「涙には違ひないけれど、私が泣いてゐるのではない」

「そんなら誰が泣いてゐるのですか。その涙は誰の涙なのですか」

「これは月の涙だよ。お月様が泣いてゐて、その涙が私の頬の上に着ちるのだよ。あれ御覧、あの通りお月様は泣いていらつしやる」

さう云はれて、私も同じやうに大空の月を仰いだ。しかし、果してお月様が泣いてゐるのかどうかよくは分らなかつた。私は多分、自分分は子供であるから其れが分らないのであらうと思つた。それにしても、月の涙が女の頬の上にはかり落ちて来て、私の頬に降りか、らないのは何故であらう。

「あ、やつぱり小母さんが泣いてゐるんだ。小母さんは嘘を云つたのだ」

私は突然、さう云はずにはゐられなかつた。なぜかと云ふのに、女

は首を擡げたま、その泣き顔を私に悟られないやうにして、しきりにしくくとしやくり上げてゐたのである。

「いゝえ、いゝえ、何で私が泣いてゐるものか。私はどんなに悲しくつても泣きはしない」

女は泣いている理由を「お月様が泣いて」いて「その涙」が自分の顔に落ちているからだといひ、個人的な理由では泣きはしないと。すなわち、女は泣いている「月」の「悲しみ」をそのままに地上で受け止めて、それをそのままに引き受けているだけだと主張している。

一方「私」は、自分が道中抱え続けてきた「理由の知れない無限の悲しみ」を「月の色が訳もなく悲しいやう」に「迫つて居る」と感じ、それは「何処からともなく心の奥に吹き込まれて来る」と捉えていた。とともにそれが「三味線を聞く時のやう」な「冴え々」とした「悲しみ」であるとして、女の弾く「新内の三味線」との通路が暗示されていたがゆえに、彼のいう「無限の悲しみ」とは、「始原的なもの」である「月」から「心の奥に吹き込まれて来る」「月」の「悲しみ」であり、「涙」であるはずだったと考えられる。そしてそれは、もともと女と共有し得る「悲しみ」であり、「涙」であるはずであった。

しかし「私」はそうした「悲しみ」を感じてはいるながら、普段は「泣虫」であるにもかかわらず歩いてくる途中では「涙一滴こぼして」いない。その「悲しみ」は、家の没落や貧困、友達との再会のかなわなこことといった個人的な理由による「悲しみ」とは異質なものとして「私」

には区別されていたが、このことは、個人的な理由では泣きはしないと書いた女と同様に、その「悲しみ」は個人的な事情がもたらすものではないことを理解している点では、もともと女と認識に通じる点があった。にもかかわらず、「月の涙」が女のように自分の「頬に降りか、らない」理由がわからず、女が嘘をついていると疑っている。「私」は、女のように「月」の「悲しみ」をそのままに地上で受け止めて、それをそのままに自ら引き受けることができない。

では、女が「月の涙」を引き受けており、「私」はそれを引き受けることができていないということはいかなることか。レヴィナスは、「始原的なものはどこでもないところから私たちに到来すると語りうる。始原的なものが私たちに呈示するおもては、ある対象を規定するものではなく、完全に匿名的なものでありつづける。それは風であり大地であり、海であり空であつて、また大気である。規定されていないありかたとここで言われるのは、限界を踏み越える無限なものとおなじものではない。始原的なものは、有限なものとは無限なものという区別に先だっているからである。なんらかのもの、質的な規定に抵抗しながらあらわれる、なんらかの存在者が問題なのではない。質は始原的なものにあつて、なにも規定しないものとしてあらわれるのである」¹⁸、「私を支える大地の堅固さ、私の頭上にひろがる空の蒼さ、風のそよぎ、海の波浪、光の煌めきといったものは、なにかの実体には懸かっているものではない。それらはどこでもないところから到来する。どこでもないところから、存在しない『或るもの』から到来し、あらわれるなものも存在しないのになら

らわれ、したがってまた、私があるのみなもとを所有することができずに、絶えず到来する」¹⁹と述べている。わたくしたちは普段様々なものを「有限」化して所有しており、そうしたことに大きな懷疑を抱かないでいるが、レヴィナスはそれを批判的に問題化し、わたくしたちや、わたくしたちに現れるものは、もともとは「有限」と「無限」の区別以前の「始原的なもの」に属し、それらは「どこでもないところ」から「到来する」ものとしている。

街道を歩きながら自分が「もう此の世の人間ではないのか」と思い、「人間が死んでから長い旅に上る、其の旅」をしているのではないかとも思う。「私」は、女（母）と出会った月光に煌めく「海」のある光景について、この現世へと生まれて区切られる前の「前世」、「永遠」、再び帰るゆく所である「死」の世界など、わたくしたちがわたくしたちとして「有限」なものとして切り取られる以前の、かつてわたくしたちが内包され、またゆくゆくは再び内包されるであろう、明確に規定したり所有することのできない「匿名的」で、どこどのようなものとも具体的に指示して覗き込むことのできない「どこでもないところ」、「始原的なもの」から、その「景色」は「到来する」もののように探っている。

つまり、その「景色」を織りなす「月の光」は本来、「私」や女（母）のような今地上にある者に「どこでもないところ」から「到来」しているものであり、存在を「有限」と「無限」とに区別する以前の「始原的なもの」、いわば絶対的に他なるものとして「到来」しているものといえよう。だからこそ、「私」が「月の色」や「三味線」の音になぞらえ

ていた「悲しみ」が「理由の知れない無限の悲しみ」であり、「心の奥に吹き込まれて来る」その由来は、「何処からともない」ものであるのだ。とすれば、その「月」が泣いていて、その「悲しみ」をそのままに受け入れて泣いている女とは、「有限」なものがそれとして区別される前の「始原的なもの」から「到来」する「悲しみ」を「無条件」に「歓待」しているのである。「月の涙」として流す「涙」が「初めは露の玉の如く滴々とこぼれてゐたものが、見るうちに頬一面を水のやうに濡らして、鼻の孔へも口の中へも容赦なく侵入して行く」ままに任せている女は、自らを「月」という「到来する」ものに与えている。

その一方で、「それ御覧なさい。小母さんは其の通り泣いてゐるぢやありませんか。ねえ小母さん、何がそんなに悲しくつて泣いてゐるんです」と、相手の個人的な感情にその理由を縮減してさら問いかける「私」は、泣いている、「悲しみ」を抱いた「月」を「無条件」に「歓待」できいていないということであり、「始原的なもの」、「どこからでもないところ」から「到来する」ものとの通路を遮断していくことを示している。そしてそれは、「到来」した女（母）を「無条件」に「歓待」することをも困難にしていくな。

五 エコノミーのなかの母子

「私」と女とのやりとりを通じて、双方が母子であり、女は一昨年亡くなった母であることが確認されていく過程について考えてみたい。そ

れは最終的に母子の一体化が成し遂げられたというような事態であるのだろうか。

「お前は何が悲しいとお云ひなのかい？ こんな月夜に斯うして外を歩いて居れば、誰でも悲しくなるぢやないか。お前だつて心の中ではきつと悲しいに違ひない」

「それはさうです。私も今夜は悲しくつて仕様がななのです。ほんたうにどう云ふ訳でせう」

「だからあの月を御覧と云ふのさ。悲しいのは月のせゐなのさ。

—— お前もそんなに悲しいのなら、私と一緒に泣いておくれ。ね、後生だから泣いておくれ」

自分に理由があつて悲しくて泣いているのではなく、「月」が泣いていて、自分はその「月の涙」をそのままに受けとめると女は述べている。彼女は「私」と一緒に「月」を「無条件」に「歓待」してくれることを願う。「私」に対しても同様に悲しいに違ひないと推察するところには、共に「月」の「悲しみ」をそのまま受けとめ「歓待」することが可能な存在として関係性を結ぼうとする意図が感じられる。そしてそれのみならず、同時に女は、泣いている自分をも「私」が「無条件」に「歓待」してくれることを求めている。そのやり取りの間、女は「三味線」の手を止めずに弾いているが、「三味線」の音は「月」の「悲しみ」をなぞらえるものであつたことから、それは「私」に「始原的なもの」、「ど

こでもないところ」から「到来」する他なる者を「歓待」することを迫るものである。

「それぢや小母さんも泣き顔を隠さないで、私の方を向いて下さい。私は小母さんの顔が見たいのです」

「あ、さうだつたね、泣き顔を隠したのはほんとに私が悪かつたね。い、子だから堪忍しておくれよ」

空を仰いでゐた女は、その時さつと頭を振り向けて、編笠を傾けながら私の方を覗き込んだ。

「さあ、私の顔を見なければとつくりと見るが、い、。私は此の通り泣いてゐるのだよ。私の頬べたはこんなに涙で濡れてゐるのだよ。

さあお前も私と一緒に泣いておくれ。今夜の月が照つてゐる間は、何処までも一緒に泣きながら此の街道を歩いて行かう」

「私」は女の要請通り泣くかわりに、その顔を見せてくれることを求める。交換条件が持ち出されることにより、泣いている「月」をも「私」に「歓待」しようという意図が逸れて、「条件」付きの「歓待」になつてしまふ。そしてそのことは同時に、「到来」した女を「条件」付きで「歓待」してしまふということにもなる。

「お、よく泣いておくれたねえ。お前が泣いておくれたと、私は一層悲しくなる。悲しくつてくたまらなくなる。だけど私は悲し

「いのが好きなんだから、いつそ泣けるだけ泣かせておくれよ」

女も、自分が「私」の要求に従って顔を見せことをきつかけに、それを交換条件とすることで、このまま一緒に泣き続けることを要求している。しかも「悲しいのが好き」なので泣きたいというように、泣いている「月の涙」をそのままに受けとめる「歓待」ではなく、また「どんなに悲しくつても泣きはしない」と個人的な感情、理由では泣かないことを宣言していたにもかかわらず、個人の心地よさを求めて泣くことを露呈させている。「歓待」は「歓待」する側の個人的な欲求に染まり出している。

女の泣いている様子を見ている「私」も、彼女が泣いていることが「いかにも好い心持さうであつた。その心持は私にもはつきりと感ぜられた」と、その観察から自らもまたその心地よさを味わうことを泣くことの目的にする。「悲しみ」を抱いた「月」の「歓待」は、「私」と女相互に条件を交わした「条件」付きの「歓待」に変質してしまう。

「小母さん、小母さん、私は小母さんの云ふ通りにして、一緒に泣いてゐるんです。だから其の代り小母さんの事を姉さんと呼ばしてくれませんか。ねえ、小母さん、此れから小母さんの事を姉さんと云つたつていゝでせう」

「なぜだい？ なぜお前はそんな事を云ふのだい？」

その時女は、すゝきの穂のやうに細い眼をしみぐゝと私の顔に注い

で云つた。

「だつて私には姉さんのやうな気がしてならないんですもの。きつと小母さんは私の姉さんに違ひない。ねえ、さうでせう？ さうでなくつても、此れから私の姉さんになつてくれてもいい、でせう」

「お前には姉さんがある訳はないぢやないか。お前には弟と妹があるだけぢやないか。——お前に小母さんだの姉さんだのと云はれると、私は猶更悲しくなるよ」

「それぢや何と云つたらいいんです」

「何と云ふつて、お前は私を忘れたのかい？ 私はお前のお母様ぢやないか」

かう云ひながら、女は顔を出るだけ私の顔に近づけた。その瞬間に私ははつと思つた。云はれて見れば成る程母に違ひない。母がこんなに若く美しい筈はないのだが、それでもたしかに母に違ひない。どう云ふ訳か私はそれを疑ふことが出来なかつた。私はまだ小さな子供だ。だから母が此のくらゐ若くて美しいのは当たり前かもしれない、と思つた。

「あ、お母さん、お母さんでしたか。私は先からお母さんを捜してゐたんです」

「お、潤一や、やつとお母さんが分つたかい。分つてくれたかい。——」
母は喜びに顫へる声でかう云つた。さうして私をしつかりと抱きしめたまゝ、立ちすくんだ。私も一生懸命に抱き附いて離れなかつた。母の懐には甘い乳房の匂が暖かく籠つてゐた。……

邂逅した「妖艶な美女」を「小母さん」と呼び、「姉さん」と呼ぼうとしていた段階では、相手をそうした呼び名によって把握することからも、「私」が彼女の〈女性性〉に喚起される性的な魅力に捉えられていることを示すが、自分の母であることが明らかになることで、近親相姦の危うさからの回避がなされる。谷崎の〈母恋いもの〉については、「母性」と〈女性性〉とが重ねあわされる特徴がこれまでにも指摘されてきている。この夢の中の「私」は「三十四歳」の男の意識を有しつつ、「七つか八つの子供」でもあるのだが、「三十四歳」の男の女への性的欲望は、その女が母として正体が明らかになり、「子供」が母の「甘い乳房の匂」を懐かしむ欲求、母への憧憬へと変化することで封じられる。²⁰

しかし、この母子が双方を確認し抱き合う場面は、そうした〈母性〉と〈女性性〉との絡まり合いという谷崎の〈母恋いもの〉の特徴を端的に示しているものとしてのみ理解されるべきものではないだろう。またここで両者が何者であるのかが互いに承認されることで、母子再会と一体化が実現されたと見るべきでもない。「歓待とは、到来者を問いたただすことなのか。歓待は、来る者に問いを差し向けることから始まるのでしょうか」²¹と問うデリダは以下のように述べている。

絶対的で誇張的で無条件な歓待とは、言葉を停止すること、ある限定された言葉を、さらには他者への呼びかけを停止することにあるのではないか。つまり他者にたいして、あなたは誰だ、名前は何か、どこから来たのだ、などと尋ねたいという誘惑は抑えなければなら

ないのではないか。さまざまな必要条件を通告するような問いを問うことは控えなければならないのではないか。さもないと歓待には限定が加えられ、権利と義務に縛り付けられ、そこに閉じ込められてしまうのではないだろうか。こうして歓待は、円環の経済^{エコノミー}配分^{レジット}法則に閉じ込められてしまうのではないか、とわたしたちは問うてきたのです。つねにジレンマが狙っています。一方には、権利や義務、さらには政治さえも越える無条件の歓待があり、他方には権利や義務によって囲い込まれている歓待があります。²²

母と子の互いの存在の実態が確認されるこの過程は、名前を確認し合うことで、「相互性（盟約への参加）」などを要求してはならず、名前さえ尋ねてもいいけない、「絶対的な他者、知られざる匿名の他者にたいしても贈与しなくてはな」らないとされる、デリダがいうところの「絶対的な歓待の掟」²³が機能しない。「問いと名前の消失における迎え入れから始まる」²⁴はずの「絶対的な歓待」は二人の間では行われない。「月」の「無条件な歓待」のみならず、それを通しての、出会った二人が相互に向けるべきであった「無条件な歓待」も困難に終わり、「同定可能な主体にたいして、名前によって同定可能な主体にたいして」²⁵なされる「歓待」へと陥落する。互いが互いに見せ合い一見共有しあえているかのようにも見える「涙」は、「知られざる匿名の他者にたいして」もなされるべき「贈与」ではない。

「私」は初めに訪れた家の「壚」に「無条件な歓待」を求めつつ得ら

れなかった。にもかかわらず、その後に出会った母に対しては、交換条件を介させた、「円環の経済」配分法則」に基づく「涙」しか「贈与」しなかった。他者から、他者として「無条件な歓待」を受けられなかった子供であるとともに、母を「無条件な歓待」で迎えない子供となっている。そして母もまた子に対し交換条件を示すことで「無条件な歓待」をなし得なかった。だからこの物語において「無条件」な迎え入れによる母子の融合や一体化などは成立していない。「私」は「夢」から覚めて「新しい涙」をこぼす。しかし母子の融合や一体化は、「夢」から覚めることによって消失したのではない。既に「夢」の中において、それは成し遂げられてはいなかったのだ。

母子の間においてさえも、いや、誰でもないこの母でなければならず、また他の子ではないこの子でなければならぬという、相互の同定と承認が強く求められる関係性であるがゆえにこそ、親子の関係というものには「無条件な歓待」の成立がかえって最も難しい場であるのかもしれない。一見、母子の喜びに溢れた、母子の融合が出来た、〈母性思慕〉の成就であるかのような瞬間には、そうしたアイロニーが潜んでいる。従来〈母恋いもの〉として位置づけられてきたこの小説は、親子関係におけるそうしたアポリアをあぶり出すテキストとなっているのだ。

六 結び―〈母恋いもの〉における「歓待」と「贈与」について―

こうしてこの小説では「私」と友人仲間、二人の母との関係性をめぐつ

て、「贈与」や「歓待」の問題が重要であるということが明らかになった。「新内の流し」姿の母とのやりとりにおいても、相手のために泣くことに交換条件が提示されることで、それは「歓待」ということのみならず、「贈与」ということについても相手に負債意識を与えることで、反対の「贈与」を得ようとする交換のエコノミーに堕してしまっている。デリダは「贈与」があるためには「相互性、返還、交換、反対」贈与があつてはなりません。もし他人が私に、私が彼に与えるものを返すとしたら、贈与はあらなかっただろう」²⁶として、受け取った人がそれを「贈与」と認識してしまうとその時点でそれは「贈与」ではなく、「円環の経済」配分法則」に回収されてしまうという。

谷崎の〈母恋いもの〉小説のうち、『少将滋幹の母』においては、藤原国経の北の方を奪い取ろうとする藤原時平の策略において「贈与」と「歓待」は巧妙に機能させられている。

自分は昨夜の饗宴を、平素の左大臣の恩に報いる絶好の機会であると思ひ、出来るだけのもてなしをしたには違ひなかつたが、一方では、自分の力に限りがあつて、到底左大臣を満足させる程の款待をなし得ないのを、耻かしくも齒痒くも感ずる念が一杯であつた。自分さう云ふ自責の心持、——こんな貧弱な饗応をしたのでは相済まない、何かなもつと喜んで戴くことは、——と云ふ心持があつた矢先に、左大臣からあゝ云ふ風に云はれ、剩へ「物惜しみをするな」とまで云はれたのがぐつと答へて、左大臣が所望とあらば、どんな

物でも差出す料簡になつたのであつた。

七十代で五十歳ほど年下の妻を持つ帥の大納言藤原国経に対し、その美貌とされる北の方を奪い取ろうと企む甥の左大臣藤原時平は、国経に多くの贈り物をし恩義を着せる。その挙句、国経の屋敷で催された新年の酒宴の席で、物惜しみするなど返礼を要求し、北の方を返礼品として連れ去る。時平が国経に行つてきた「款待」は、見返りを期待せずただ「贈与」し続けるというものではなく、国経に「反対・贈与」の念を生じさせるための、「条件」付きの「款待」に他ならなかつた。国経は「円環の経済」^{コノノミ}「配分法則」^{ノミ}の中に閉じ込められたのであり、そのことが、母を幼くして奪い取られた滋幹に四十年以上も母を思慕させ続けることになる。

しかしそのことのみではない。国経は普段から「世にも稀な人」を妻としていながら、「世間がその事実に関心であることが物足りなく」、「羨ましがらせてやりた」¹く思つていた。そのような北の方を持つことに「羨望に堪へぬ顔つき」をした時平の顔を見て、国経は「大いに満足」する。そしてその北の方を「贈与」することによって、自らの優位性を一時相手に示すことができたわけである。時平の伯父であるが、地位は甥に及ばない。こうした国経の中にあつた地位をめぐる劣位意識をわずかな間でも拭い去つて相手の優位に立とうとする行為は、マルセル・モーヌがアメリカ北西部の部族の間で行われていたものとして挙げている、「贈与」を受けた人が相手に貰つた物の価値以上の物を送り返す義務が

あり、そのことで蕩尽も辞さず相互に対抗し合う「ポトラッチ」²⁷にも類似した行為だ。

さらに国経は北の方を誰か適切な人物にゆずることで、こうした老体の夫の妻であるという彼女の「不幸な境涯」からすくい上げてやれば「彼女も始めて、此の老人の愛情がいかに献身的なものであつたかと云ふことを、理解するであらう。その暁にこそ、彼女は此の老人に向つて無限の感謝と万斛の涙をそぐであらう」、「泣いて礼を云つてくれるであらう」と考えている。北の方に適切な新たな夫を与える「贈与」を行うことで、感謝の念という「反対・贈与」を期待しているのであり、そこには「円環の経済」^{コノノミ}「配分法則」^{ノミ}が働いており、またそれは「絶対的な款待」でもない。このように『少将滋幹の母』は、子供が離れた母を長く思慕し続けることになる原因として「款待」や「贈与」の構造が谷崎の〈母恋いもの〉に効果的に使用された例といえよう。

こうして『母を恋ふる記』と『少将滋幹の母』の二つのテキストには、他者の迎え入れにおける「款待」と「贈与」という倫理の根幹に関わる問いが仕掛けられており、それは谷崎の〈母恋いもの〉小説が内包している問題系の一つとして見逃せないものであることを指摘しておきたい。

注

1 千葉俊二「母を恋ふる記」とその前後」（紅野敏郎編著『論考 谷崎潤一郎』桜楓社 一九八〇・五）一〇〇頁。

- 2 秋山公男『近代文学 美の諸相』（翰林書房 二〇〇一・二〇）三八〇頁。
- 3 金賢京『人、場所、欲待 平等な社会のための3つの概念』（影本剛訳 青土社 二〇二〇・四）一七二―一七三頁。
- 4 金前掲書 一七三頁。
- 5 金前掲書 一七五頁。
- 6 金前掲書 一七八頁。
- 7 金前掲書 一八一頁。
- 8 金前掲書 一七九頁。
- 9 ピエール・ブルデューは、「慣習行動や選好の要因」として、様々な「文化的慣習行動」が「学歴資本」と「出身階層」に密接な関係で結びついていることを指摘している（『ディスタンクシオン 社会的判断力批判 I』石井洋二郎訳 藤原書店 一九九〇・四）二十二頁。
- 10 千葉前掲論文 一〇四―一〇五頁。
- 11 永栄啓伸『谷崎潤一郎試論―母性への視点―』（有精堂出版 一九八八・七）一四二―一四三頁。
- 12 秋山前掲書 三七五頁。
- 13 仁瓶浩明（「母」の〈夢〉、〈物語〉の〈夢〉、谷崎潤一郎の、―『母を恋ふる記』をめくって―）（『愛知県立芸術大学紀要』十九号 一九九〇・三）六頁。付されていた傍点は省略した。
- 14 ジャック・デリダ「異邦人の問い…異邦人から来た問い」（ジャック・デリダ、アンヌ・デュフルマンテル『欲待について パリ講義の記録』廣瀬浩司訳 ちくま学芸文庫 二〇一八・二）六十七頁。これを含め、以下デリダからの引用は、付されていた傍点を省略した。
- 15 デリダ「欲待の歩み≡欲待はない」（デリダ前掲書）一〇七―一〇八頁。
- 16 エマニュエル・レヴィナス『全体性と無限（上）』（熊野純彦訳 岩波文庫 二〇〇五・十一）二五七頁。これを含め、以下レヴィナスからの引用は、付されていた傍点を省略した。
- 17 レヴィナス前掲書 二五七―二五八頁。
- 18 レヴィナス前掲書 二六一頁。
- 19 レヴィナス前掲書 二八一―二八二頁。
- 20 例えば千葉は、母が「うら若い美女として姿を現わした」ことには「現在の『私』は彼女を性愛の対象として認めていた」ことが暗示されているが、「現在の『私』が『私はまだ小さな子供だ』と規定することによって、『私』のインセストな感情はいわば小児的エロスに還元される」と指摘している（千葉前掲論文 一〇九頁）。また森安理文は「美しい鳥追いが母に変貌するのであって、母が鳥追いになるのではない」がゆえに、「母性的なものをすべて官能的なものに置き換えてみるという『性』の構造」は可能でなく、「成年としての欲望が欲望として達成しない間に、たちまち小児の欲望にとつてかわられるのであるから、これは従来いわれてきた母子相姦のエロスの構造とはいえない」としている（森安理文『谷崎潤一郎 あそびの文学』国書刊行会 一九八三・四 三三〇頁）。
- 21 デリダ「異邦人の問い…異邦人から来た問い」（デリダ前掲書）六十八頁。
- 22 デリダ「欲待の歩み≡欲待はない」（デリダ前掲書）一五四頁。
- 23 デリダ「異邦人の問い…異邦人から来た問い」（デリダ前掲書）六十七頁。
- 24 デリダ「異邦人の問い…異邦人から来た問い」（デリダ前掲書）六十九頁。
- 25 デリダ「異邦人の問い…異邦人から来た問い」（デリダ前掲書）六十九頁。
- 26 デリダ「時間を―与える」（『他者の言語 デリダの日本講演』高橋允昭訳 法政大学出版局 一九八九・十二）七十三頁。
- 27 マルセル・モース『贈与論 他二篇』（森山工訳 岩波文庫 二〇一四・七）二一三―二一五頁。

『母を恋ふる記』の本文引用は『谷崎潤一郎全集』第六卷（中央公論新社 二〇一五・十二）、『幼少時代』『少将滋幹の母』の引用は『谷崎潤一郎全集』第二十一卷（中央公論新社 二〇一六・四）により、ルビは省略した。